

# 智性・勘性・温性。量から質の時代へ

恋愛、震災ボランティア、知事、国会议員、さまざまな話題を提供してきた田中康夫氏が、フルタイムの作家として戻って来た。「なんとなく、クリスタル」で当時21才だったヒロイン由利。2014年、50代になった彼女とともに。

「久しぶりに小説が書けたのは、失職して時間ができたというのも大きいですね」

たとえば長野県知事時代は、睡眠時間が毎日3、4時間という多忙さ。手のアトピーが、毎に悪化した。

「ストレスが原因かな。ネクタイを締めるのもひと苦労でした。ザラザラした手で握手するわけにもいかず、支援者が差し入れてくれた長野県産のシルクで編んだ手袋が欠かせませんでした。知事を退任したら、不思議とおさまりましたけど」

そんな時期も支えてくれた10才年下のJAL客室乗務員だった恵さんと結婚したのは、兵庫県尼崎市を地盤とする衆議院議員だった4年前のことだ。

## 妻と愛犬ロッタに 癒される日々

恵さんは田中さんが16年も連載した異色エッセイ「東京ペログリ日記」に最多登場のW嬢のモデルといわれる。そう考えると、ずいぶん長い春だった。

「家内とは、ケミストリー（相性）が合つんでしょうね」

先日もこんなことがあった。今回の『33年後のなんとなく、クリスタル』の著者プロフィールはナント、タナカ家の家族の一員である4才のトイプードルのロッタ嬢が担当（という仕掛け）。「ロッタの書いた原稿」をテーブルに置いていたら、妻が買い物へ出かける前にチラッと見て、「パパとママのウザイくらいの

愛を一身に受けて成長中」なんて鉛筆で書き加えたんですよ。確かにその一文があるのとないのとでは違う。思わず、印税の10円分くらいは妻に振り込まなきゃと思いました。なんんで、のろけ話に聞こえちゃいそうですが、僕にはない才能ですね」

執筆に行き詰まって「オレ、才能ないな」と夫がぼやいてる、「才能の枯渇は才能のある人が言う。ヨシーチェうそ」とメモがそつと回ってくる。「口

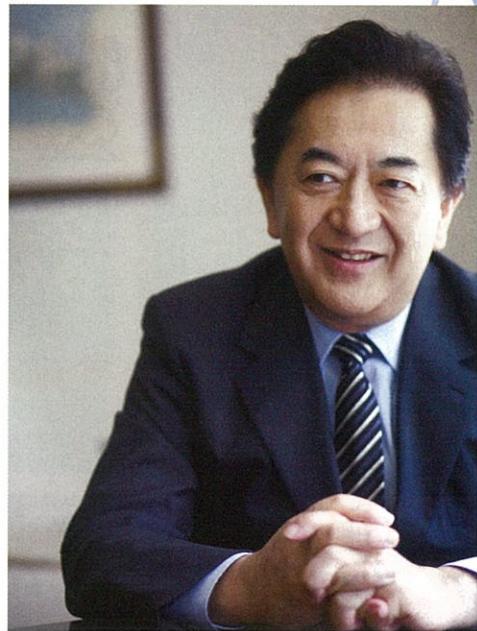


続編に登場するロッタちゃん。



田中康夫 Yasuo Tanaka

1956年東京生まれ、作家。1980年一橋大学在学中に執筆した小説『なんとなく、クリスタル』が第17回文藝賞を受賞。2000年より長野県知事(2期)。2007年から2012年まで参議院議員、衆議院議員。11月末に17年ぶりの小説『33年後のなんとなく、クリスタル』(河出書房新社)を出版。http://www.nippon-dream.com/



3才のとき、母親の友人に「おとなしい坊ちゃんですね」と言われて「猫をかぶってるんです」と答えたような少年だった。「どうやら、その前日の夕食の会話で大学の研究者だった父と教師だった母が使った言葉らしく、意味は判らないけど、こんなニュアンスだと“耳学問”で思ったんですね」。

山田美保子さんが語る  
33年後の“なんクリ”

## なんクリ最終ページの 出生率データの意味は

33年前、『なんクリ』の註の最後に、日本の合計特殊出生率と高齢化率のデータが2ページにわたって記されていたことに注目した人は少なかった。



「なんとなく、クリスタル」発売後、ブランド品を身に着ける「クリスタル族」と呼ばれる女性が街にあふれた。

は、タイ風はるさめサラダ（ヤムウンセン）や、季節の食材を使つた土鍋ごはんなど、恵さんの手料理。お気に入りのイタリアの白ワインを2人で2本も空けて11時過ぎにはベッド、朝の5時にはロッタに起こされると

たちと僕は通ずる部分があつたと今でも思います。

実は『なんクリ』の女性達もそう。表層的にはアッパーミディアムと呼ばれる暮らし向きかもしれないけれど、すべてが数字で動く無慈悲な『市場経済』よりも、

急速に少子化や高齢化が進んでいます。真の豊かさとはなんのか、考えざるを得ない時代だ。

「なのに今回の政府の骨太方針は、50年後も人口1億人維持を掲げ、移民を受け入れる議論まで始めている。でもイタリアやフランスの方が、ずっと豊かな人生でしょ。両国と同じ6千万人前後で持続可能な日本を目指す発想の転換が必要だと思いませんか。そもそも福祉、医療、介護、教育といった分野は、人が

田中さんの祖母は米国留学をした元祖クリスタル族のハイカラさん。その彼が前々回の総選挙で尼崎を選んだのは、自分に正直に生きる尼崎のオバチャンたちに、直感的に理解してもらえたので、直感的に理解してもらえたのだと思つたから。

「頭でつかちな知性でなく、生活の中で得た『智性』。やわな感性ではなく、鋭い勘所の『勘性』。そして正義感と人情味を感じさせる高い体温の『温性』。そんな地アタマを持つた尼崎の女性

『市場』の人間味に共感するタイプ。そうして誰もが歯車に組み込まれて息苦しい社会の中で、『微力だけど無力じゃない』と信じて、自分の身の丈でやれることをやっていこうとする意欲。ブランドものを持っているとか、関係ない。僕はそういう人達に惹かれるんです」

「95年の阪神・淡路大震災の後、田中さんが50ccバイクで被災地を駆け回り、外資系メークーから提供を受けた化粧水や口紅を配っていたのが印象的でした。支援物資といふとまじめで地味なものが多いけれど、気持ちが上がります。なんとなーと、『なんクリ』は、そういう田中さんの美意識がいい形で出ていた小説で、読ませてもらつてよかったです」という気持ちになりました。

田中さんの'80年代の女性誌連載『サースティ』は、満たされているのに満たされていない女性たちの感覚を描いていたけれど、『33年後』は違つ。年齢を重ねて、のどをうるおすべを身につけてきたのが私たち。自分なりに感じとつて行動することができるようになつた年代の気持ちに寄り添つたストーリーでしたね。

## 33年ぶりに会えた主人公の成長に元気をもらいました

33年後の「なんクリ」

時代は黄晉に見えるけれど、この光の加減は意外にも夜明け前かもしけない。『33年後のなんなく、クリスタル』は、そんな曙の光を分かち合う物語なのです

## 田中康夫さん インタビュー 2

時代に刻まれる  
世の中の文化に  
価値の優劣はない

33年前、岩波新書を読むのをありがたがると、ルイ・ヴィトンのバッグを買ってうれしい気持ちは、同じ人間が抱く等価な感情だと言い放つて、24才の田中さんは「良識派」の神経を逆なでした。

「その2つは同じ次元で語れない、と彼らは思い込んでいた。でも、大好きな食べ物を口にしておいしいと思う瞬間は、そうした教養人と呼ばれる人々にもあるのです。時代に刻まれる世の中の文化は、功成り名遂げた芸術院の会員だけが生み出すのではない。原宿からも浅草からも、そして山あいの集落からも生まれる可能性がある。その当たり前の話を認めようとせずに目をそらしてしまうのは、しなやかな日本の成熟を妨げることになってしまいますよ、と33年前も今も、僕は考え、語り、動いているのだと思います」



33年前の田中さん